

# グループワーク実践における支援者とメンバーの関係性に関する研究 —ワーカーが特定のメンバーを抱える危険性—

田中 利則<sup>a</sup>

<sup>a</sup> 湘北短期大学保育学科

## 【抄録】

グループワークはメンバー（参加者、以下略）ひとり一人が個々抱えている問題に対し、グループ・ダイナミクスを活用することによって各々の問題の解決に取り組むという目的を持っている。そのなかでソーシャルワーカーはグループワークの目的を見失わずにメンバー個々の目標に応じて支援を展開するという役割がある。

本稿ではグループワークのワーカーが、活動を行うなかで設定された目的に向けてグループダイナミクスを活用する技術について吟味することを意図して、福祉型障害者福祉サービス事業所・グループ「さくら」における実践から、あるエピソードに注目し、事例として提示する。

エピソードを提示するに当たってはグループワークに参加しているメンバーとの関わるなかで、筆者の行動や感情の動きに着目したエピソードを記載し、その記述を再構成し直すなかで自ら導き出した関係構造からグループワーク実践が隠し持つ問題点や課題、特にメンバーを支援する際に自信のなさや不安などの感情を抱いたり、メンバーを抱え込んだりする関係に陥ってしまうことの危険性について検討する。

## 【キーワード】

グループワーク・場面再構成・抱え関係・ゆらぎ・グループワーク不成立

## I エピソードの記述

と思われるエピソードを取り上げることとする。

### 1. エピソードの記述方法

グループワークの記述方法は主に過去から精神看護やグループワーク研究で活用されてきたエピソードの再構成法（外口,1981;宮本,1995;正村,2013）を参考にした。着目したエピソードは私がグループワークの非常勤のワーカーとして担当し活動してきたなかで、有効な振り返りができた

### 2. グループワークの行われた事業所とメンバー構成の紹介

本稿の研究対象とした社会福祉の現場はA地域にあるグループ「さくら」（就労移行支援・自立訓練）である。この事業所は主に精神障害を持つ人たちを対象としたグループワークを週1回・2時間程度行っている。グループ「さくら」では

グループワークの実践を5年前から行っている。

当日、グループワークに参加しているメンバーは男性10名（精神障害者8名・軽度知的障害者2名）、女性8名（精神障害者6名・軽度の知的障害者2名）である。これらのメンバーのなかで、今回、初めて参加したのは男女合わせて3名である。この事業所のグループワークを務めるのは社会福祉士及び精神保健福祉士の国家資格を有するソーシャルワーカーの男性2名（男性1名はソーシャルワーカー歴10年の職員・B氏である。もう1名のワーカーは福祉型障害者施設職員の経験は30年近くあるが、グループワークのワーカー経験1年弱の私）である。そして、女性のソーシャルワーカー2名（C及びD女氏は2名とも精神保健福祉士の国家資格を有しており、グループワークのワーカーとして5年程度の経験がある）である。

### 3. 私の自己紹介とグループワークにワーカーとして参加した意図

私は男性で年齢は65歳である。現職は短期大学保育学科の教員をしている。国家資格は社会福祉士及び精神保健福祉士を取得している。福祉型障害者施設（入所）職員時代（24年間）を含めて、障害のある人たちとの関わりは40年ほどの経験がある。しかし、精神障害のある人との関わりを深めてきたのはこの5年ほどである。また、知的障害者や発達障害者等に関するソーシャルワーカーとしての経験は豊富であるが、グループワークのワーカーとしての経験、特に精神障害のある人たちが参加するワーカーを務めた経験は極めて浅い。

私がグループワーカーの経験を積みたいと考えたのは、現在勤務している保育系の短期大学での仕事が65歳になると定年退職となるために、その後の活動の場を障害者支援（精神障害者を含め

た）、特に相談支援やグループワーク活動に力を入れていきたいと考え、その準備をするためである。

### 4. プログラムの内容・設定の説明

グループワークのプログラムは、週1回、グループ「さくら」の隣にある市立体育館で定期的に行っているグループワークの内容と設定である。そこでの活動内容は主にテニスに良く似たパドルテニスを柱に取り組んでいる。大半のメンバーのパドルテニスの経験はおおよそ3年ほどである。通常は、体育館内の床にテープを貼り、コートを手造りで準備し、ゲームを行っている。

当日参加しているメンバーは16名（欠席2名）だった。そのために男性と女性が4名づつに分かれてチームを結成した。1チームを4名で構成し、各チームには女性が必ず1名入る形でチーム作りを行った。ゲーム形式は総当たり戦である。

ゲームの間に喉が渇くので、オレンジジュースとウーロン茶、水、飴玉（塩）を準備して、休憩用の長椅子の上においていた。

#### \*パドルテニスの紹介

パドルテニスを分かりやすく表現すれば、サッカーに対するフットサルのようなテニスの縮小版スポーツといえる。テニスを小さくアレンジした競技は数多く存在するが、板状のラケット（パドル）やフェルト付きの柔らかいボールを使用すること、コートがテニスの約1/3であること等いくつかの点を除き、基本技術やルールがほとんどテニスと同じなので親しみやすくしかも安全なラケットスポーツである。

### 5. 事例の中心となる<sup>はるな</sup>春奈さんのプロフィール

春奈さんは38歳になる女性である。彼女の父親はグループ「さくら」の保護者会会長を務めて

いる。春奈さんは、4年制大学を卒業して一部上場企業に就職したが、人間関係がうまくいかなかったことや業務が多忙であったなかで幻聴や幻覚を感じるようになった。精神神経科で受診したところ、統合失調症と診断された。仕事には診断を受けた日から行かなくなった。24歳の時であった。その後、入退院を繰り返しているが、この2年ほどは寛解状態にある。しかし、母親が死亡後、兄夫婦との関係が劣悪になったことから、自宅を出てグループホームで暮らしたいという本人の希望を優先して、現在、グループ「さくら」(就労移行支援・自立訓練)が運営しているグループホームに入居している。そしてグループ「さくら」に通所し、就労支援を受けている。なお、彼女は精神保健福祉手帳を取得している。

また、春奈さんはやや肥満気味であり、ボールを追いかけて走り回らなければならないパドルテニスのゲームはやや苦手ようである。

## 6. 春奈さんと私との関係

私が春奈さんと出会ったのはグループ「さくら」にグループワークの実践を学ぶために通い始めてからである。したがって、グループワークのワーカーの経験年数は1年弱である。最初の出会いかから、彼女は私に良くも悪くも積極的に語り掛けてきていた。私は福祉型障害者(入所)施設職員や保育系短大の教員としての経験から、誰に対しても穏やかな気持ちで接するよう心がけてきた。しかし、メンバーの反応はさまざまである。そのなかで春奈さんは穏やか雰囲気私に接してくれるときもあるが、精神的に不安定なときには、私に思い当たる節がないのに一方的に私を中傷や批判する状況が見られることがあり、ワーカーとしては適切ではないと思いつつ、腫物に触るような扱いをするようになっていた。

春奈さんに関する印象は、私がグループ「さく

ら」の非常勤職員のグループワークのワーカーなので、私に興味はあるが、なかなか私に上手く近づけないなかで戸惑っている印象だった。私もグループワークを学びに来ている立場から、メンバーにはなるべく深入りするのを避け、やや距離をおきながら関わりを持つようにしていた。但し、グループワークを行う上で、各メンバーと話し合いをしたほうが良いと判断したときには、専任のワーカー同席の上で、面談のために30分から1時間程度の時間を割いて話し合いをすることになっていた。春奈さんとは、これまで2回ほど他のメンバーに対する不適切な発言や態度の悪さを理由に、1時間程度の時間を割いて話し合いを行ったことがある。しかし、春奈さんの頑固さから、私と春奈さんの考えが納まりの良い形で折り合うことはなかった。

## 7. エピソードが生じた場面

パドルテニスのゲームは他の団体がバドミントンや卓球を楽しんでいる理由から、当日は体育館の片隅にコートを作って行うことにした。グループワークは毎週水曜日の午前9時から始まる決まりとなっている。春奈さん以外のメンバーやワーカーは全員揃っていたが、春奈さんはまだ顔を見せていない。彼女が遅刻をすることは珍しいことではない。当日は、本人やご家庭からお休みをするという連絡はなかったので、今日も遅刻をするのだろうとみんなで判断して、組合せ順を決め、最初の2グループがゲームを開始した。春奈さんが遅れて参加する場合は、後でゲームを行うチームに入ってもらうことにした。審判は女性のワーカーのC女氏が務めることにした。

2つのグループがゲームを始めて30分ほど過ぎた頃に春奈さんが体育館に入ってきた。いつものことだが、遅れたことの反省の弁もなく、これまで待たされていた仲間に詫びることすら行わな

い。彼女は男性のワーカーのB氏から軽く遅刻について指導をされた後で、彼から指示され、自分のチームに合流した。春奈さんは先にパドルテニスのゲームを始めている2つのチームに目をやることもなく一人で静かにお茶を飲み、手持ち無沙汰になると顔馴染みのメンバーを見つけ、つかつかと歩みより隣に座って会話を始めた。

しばらくすると、春奈さんが私のほうに近づいてきた。私が「春奈さん、遅れてきた理由は何ですか。一応、他のメンバーやワーカーにも事情を説明する必要があるのではないですか」と声をかけると、私の質問には返答をしないで、「あの人(男性)は初めて見る人だけれど誰なの」とグループのメンバーになったばかりの菊池さんの方を向きながら尋ねた。私が「あの方はグループ『さくら』の近くにお住まいの方で、菊池さんという方です」とさりげなく答えた。菊池さんは春奈さんと同年代の穏やかそうな男性である。春奈さんが「彼と話をしたい」というので菊池さんを彼女に紹介した。春奈さんは菊池さんが気に入ったらしく、相変わらず、パドルテニスのゲームを他所に、彼との話に夢中になっていた。

春奈さんは、これまでも興味を抱いた男性が現れると饒舌になる傾向があった。しかし、彼女の相手と親しくなりたいという気持ちが空回りをし、一方的な会話になることが常であった。また、自分の興味や思いを一方的に伝える傾向がある理由から、折角出会った相手に違和感を与えたり、気まずい思いをさせたりすることが少なくなかった。私は菊池さんがグループ「さくら」のメンバーになったばかりであることから、春奈さんと菊池さんとの関わりの状況が気になっていた。

そのために二人の様子を遠目に見守っていた。すると、春奈さんは私が二人の様子を見ていることに気が付き、私の行為が気に障ったのか、急に大声で私に関する誹謗中傷を口にし始めた。彼女

は「まったくあいつは専任のスタッフでもないのに口うるさいよね。自分を何様だと思っているのかな。ねーみんな」と言いながら、他のメンバーの同意を得ようとしたり、「パドルテニスのゲームなんてつまらないのでやりたくない」等と言ってふてくされたりしていた。そして、今まで話をしてきた菊池さんに注意を促す雰囲気、「あの職員は1年近くもグループワークに参加しているのに、仲間をまとめられない職員なんですよ。あの人は役に立たないから期待しないほうが良いですよ」と私に関する中傷や批判を大きな声で言い始めた。私は、この事態をどのような形で納めようかと考えながら、とにかく春奈さんが落ち着くのを待つことにした。その一方で、私は内心、ワーカーとしてのプライドを傷つけられ、苛立ちを覚えていた。

この騒動が起きたことから、ゲームを楽しんでいたメンバーも足を止め、彼女の動向を見守っていた。やけにその時間は長く感じられた。そして、大半のメンバーが、「また、始まったか」というような表情をしていた。

今回の春奈さんの感情の爆発は私がこれまで経験したなかで一番激しいものだった。私は、春奈さんから誹謗中傷をされるなかで、ワーカーであるから冷静にならなければいけないと思いつつも、彼女の中傷や批判に打ちのめされ、そして頭のなかが真っ白になり、自分の立場や役割を見失ってしまった。

私は春奈さんが言う通り、グループワークのワーカーとしては心許無い、特に、精神障害のある人たちとの関わりが浅いことから、自信のなさや不安があるのでグループワークを学んだり経験したりしてこれらの課題を解決しなければならないと思っていた。また、春奈さんに何とと言われても自分の評価やワーカーとしての価値は自ら判断できるものではないと考えていた。だから自分



のワーカーとしての評価に関しては何とも言えない。その一方で、自分はこの1年弱、精神障害のある人たちを対象としたグループワークを学ぶつもりでグループ「さくら」へ時間を割いては定期的に訪問してきた。確かに、まともにグループワークができないワーカーであると第三者から言われればその通りかもしれない。しかし、私は社会福祉分野での経験は40年ほどあり、心の何処かにソーシャルワーカーとしては素人ではないという自負がある。加えて、人生の後半になって精神保健分野の国家資格を取り、ソーシャルワークやグループワーク実践について積極的に学んでいる。だから、学ぶ姿勢に関しては誰にも負けたいと思っている。それゆえ、春奈さんからグループワーク実践の会場で、加えてグループワークに参加しているメンバーやワーカー、他の団体の方々がたくさんいる前で、大きな声で誹謗中傷をされることには納得がいかなかった。春奈さんのきつい中傷や批判を受けてやや気持ちが高ぶってきた。しかし、グループワークに参加するのが初めての菊池さんや香田さん、土田さん、あるいは顔馴染みのメンバーの前で、春奈さんに対して今の自分の苛立ちをストレートにぶつけることはソーシャルワーカーとして採るべき態度ではないと考えた。だから、私は自分の乱れた感情を押し殺した。ソーシャルワーカーとしてのプライドが、春奈さんに対して私の現在の感情をストレートに投げつける行動に向かうことを留まらせた。また、今の状況下で自分の苛立ちを春奈さんにぶつけてしまうことは春奈さんの誹謗中傷を、下手をすると正当化する恐れがあるのではないかと考えた。そして、今の私の乱れた感情を露わにすることはグループワークに参加している他のメンバーの楽しい雰囲気や壊してしまうのではないかと不安もあった。もしそうになったら他のワーカーやメンバーのみんなに迷惑をかけてしまい申し訳ない

ことになってしまう。それに菊池さんを始めとしたグループワークへ初めて参加したメンバーが、春奈さんと私の激しい感情のぶつかり合いを目にして嫌な思いをしてしまい、次回から参加しなくなるのではないかという不安も脳裏に浮かんできた。そこで、気持ちを入れ替えて、春奈さんは何か自宅で問題が生じた理由から、私に八つ当たりをする形で感情をぶつけているのだと考えるように務め、激しくゆらいでいる心を落ち着かせようと試みた。ところが、私の苛立っている感情をコントロールしようとすればするほど、かえって春奈さんに言われた時にボロボロになったワーカーとしてのプライドが心のなかでくすぶってしまい、乱れた感情を抑制することができなくなっていた。それほどまでに今日の春奈さんの私に対する中傷や批判は激しかった。

そうこうするうちにグループワークは何もなかったかのような雰囲気のなかで再開された。しかし、パドルテニスのゲームは、いつになく盛り上がらないなかで、早めに活動は終了した。そして、グループワークの振り返りをいつものように行い、次回への課題をそれぞれが述べて表面上はそつなく活動を終えた。

終わりの挨拶を終えると、春奈さんは罰が悪かったのか、親しげに私に話しかけてきた。それに対して、「私は心の底から怒っている。あなたを許せない」という乱暴な言葉使いで彼女に今の自分の気持ちをストレートに伝えた。私の感情のゆらぎは治まっではなかった。

春奈さんは私がひどく感情を害していることに気がついたらしく、ワーカーやメンバーのいる前で「あんた何を怒っているの」と問い質した。私が「私のことをグループワークに初めて参加した菊池さんへワーカーとしては未熟で、メンバーをまとめきれない非常勤職員だと言ったではないですか。私に失礼だとは思いませんか」と問い詰め

た。すると、春奈さんは「菊池さんは賢い人だから、私が口にしたことは冗談だと思っているよ。素敵な人だからそうだと思うよ」と言って、私をなだめるような口調で話かけ、その場を取り繕おうとした。しかし、私は彼女の親しげな、うわべだけの謝罪を受け入れる気持ちにはなれなかった。すると、春奈さんは舌の根の乾かない内に、小馬鹿にしたような笑みを浮かべながら、「あんたが納得いかないなら、グループ「さくら」の所長を含めて白黒つけても良いよ。それとも私の親を呼んでグループ『さくら』へ帰ってお互いが納得できるまで話しあいますか」と挑戦的な態度で絡みついた。私は、「所長や保護者会会長のあなたの父親とは何の関係もない、二人の問題だから二人で白黒つけましょう」「他のワーカーやメンバー、他の団体の人に悪いから、外でお互いが納得ゆくまで話し合しましょう」などと言って、売られた喧嘩を買うことにした。心配する他のワーカーやメンバーには一足先にグループ「さくら」に帰ってもらい、二人で体育館を出て、今回のトラブルの方を付けることにした。

私が春奈さんと感情的な衝突をするのは初めてではなかった。しかし、今日の春奈さんとのトラブルはこれまでのそれとは違っていた。特に、私はこれまで貯めこんでいた彼女への不満をまとめてぶつけ、自分の苛立ちや怒りをまともに伝えた。この時、私のワーカーとしての倫理観や価値観、プライドは完全に破綻していた。

春奈さんと激しい言い争いをしているので、周りの状況に気を回す余裕はなくなっていた。気がついてみると、グループ「さくら」へ帰ったはずのメンバーやワーカーが外へ出てきて、春奈さんと私の言い争いを怪訝そうな表情を浮かべながら体育館の玄関のほうから覗いていた。他のワーカーは困ったな、早く止めてくれないかなというような表情をしていた。しびれを切らしたのか、

メンバーのリーダー役の悟<sup>さとる</sup>さんが、春奈さんに「いい加減にしろよ。みんなが困っているだろう」「いくつになったんだよ。大人の行動をとれよ」と彼女を諭そうとした。悟さんは私が外部から来ている非常勤のワーカーであること、そのために不安定な立場であること等を考えて、これ以上問題を大きくしないほうが良いと考え、春奈さんに声をかけたのだと思った。悟さんはそれぞれのワーカーやメンバーがどのような人か、あるいは個々のワーカーやメンバーがおかれている立場、人間関係まで把握できている、人間的に幅の広い人である。春奈さんも悟さんの人柄を熟知している理由から、自分を諫め、今起きている問題をなるべく穏便に解決しようとして、声をかけてきていることがわかっている様子だった。しかし、引っ込みがつかない春奈さんは「悟は関係ないからあっちへいけよ」と悟さんに言って、彼を追い払おうとした。そして、春奈さんは小石を拾って、悟さんの方へ続けざまに投げた。悟さんは、春奈さんから急いで距離を置き、投石から自分の身を守ろうとした。加えて、とても困惑した表情をしていた。そして、他のワーカーはグループ「さくら」へ帰る時間を気にしながら、お互いの感情をぶつけ合っている二人を見守っていた。

私は自分と春奈さんとの間に生じた激しいトラブルが他のメンバーやワーカーを巻き込んでしまっていることに気が付き「はっ」とした。悔やんだ。しかし、自分と春奈さんの間で突発的に起きた問題をなかなか納まらせることができないままだった。その一方で、春奈さんの発した誹謗中傷の言動を認めがたいと思っている自分もいた。また、グループワークのワーカーである自分が感情をコントロールできずに、メンバーの一人と激しいやり取りをしている負い目を心の何処かで感じていた。そして、私は一方で醜い口論をしながらも、今起きている問題はワーカーである自分が、

適切な感情のコントロールをすれば起きなかったトラブルではなかったのか、あるいは自分がワーカーとしては未熟な人間であることから生じてしまった問題ではなかったのかと振り返り、自分を責めていた。

そのなかで私は自分が春奈さんと言い争いをしたお蔭で、悟さんと春奈さんのメンバー同士の関係に歪を生じさせてしまったという気持ちが強くなり、情けない気持ちで一杯になった。

そのように考えていると、私は身動きでなくなっていた。私はただ茫然としていた。

すると専任のワーカーである論さんが二人に近づいてきて仲裁に入ってくれた。そして、春奈さんの悟さんに対する攻撃的な言動を止めてくれた。その際に、悟さんの近くにいたメンバーの高貴さんが彼を誘ってその場を離れた。それから、その場をワーカーの論さんに任せて、二人は他のメンバーやワーカー（論さん以外の）と一緒にグループ「さくら」へ一足先に帰っていった。

私はグループワーカーとして悟さんの（その後）ことが気になっていた。しかし、何よりも論さんやメンバー、ワーカーが春奈さんと私とのトラブルに巻き込まれ、精神的な負担感を強いることになるのではないかと考え、不安で仕方がなかった。だから、他のメンバーやワーカーが先にグループ「さくら」に帰ってくれたので気が楽になった。

その後、ワーカーの論さんの提案で二人の話し合いを体育館内にある小さな会議室で継続することにした。論さんが二人の間に入ったことで春奈さんも私も気分が徐々に落ち着いてきた。それで私は春奈さんに私から提案をして、落ち着いた雰囲気での話し合いをすることにした。春奈さんも私の提案を了解してくれた。ワーカーの論さんには、春奈さんと私との話し合いには加わずに、見守りに徹することをお願いした。

私は春奈さんに「今年の7月から4回も私に攻

撃的な発言をしているが、何があなをそのようにさせているのか、教えてください」と訊ねた。すると、春奈さんは「7月の初旬にグループ『さくら』に通い始めた輝美<sup>てるみ</sup>さんを特に可愛がっているように思える。それはなぜですか」と私に質問した。この問い掛けに私は正直に答えた。私は、「輝美さんは年齢が若い（18歳）し、なかなかメンバーに馴染めない性格なので何かと気配りをしてきたのです」と答えた。春奈さんは、「他のメンバーに対するかかわりと異なり、自分に対する対応が冷たい気がしていた。それが不満だった」と私に今回のグループワークの際に攻撃的になってしまった背景にある彼女の気持ちを口にした。私は、「春奈さんにはそう見えたかもしれないが、それぞれの年齢や性格、精神状況等を考慮しながら、話をしたり支援をしたりしている」ことを語った。また、「春奈さんはグループ『さくら』においては他のメンバーと比較してお姉さんでもあり、グループの中心的存在だから、彼女の想いや願いをなるべく尊重することを心がけてきた」ことを素直に伝えた。春奈さんは、「そんなことはあなたの考えで、グループ『さくら』で働いているメンバーは平等に関わるべきではないか」と彼女の気持ちを私に突きつけた。そのことを受けて、私は「春奈さんの気持ちは良く分かりました。遅まきながら気をつけるようにします」と柔らかな言葉で、今後、配慮することを約束した。彼女は、私のその言葉を受けて、すっきりした表情を浮かべた。その表情を見て、私の気持ちを話して良いか春奈さんに確認し、そして、今日起きたトラブルについて触れることにした。「グループワークを行っている体育館のなかで、私の中傷や批判を大きな声でいうのは春奈さんのような大人が行うことではないと思う。だから、私に謝ってほしい」と今思っている自分の気持ちを率直に伝えた。春奈さんは、仕方がないなという表情をして、「あ

の時は失礼しました。ごめんなさい。今後、気をつけます」と照れ臭そうに謝った。

私は、形ばかりだけの気がするが、春奈さんから謝ってもらってようやく気持ちが楽になってきた。また、今日のグループワークが中途半端な形で終わったことについて、他のワーカーやメンバーに悪いことをしたなとつくづく思った。そして、年は重ねても、私はまだまだ未熟な、自信のない、不安に支配されやすいワーカーだなと思いつつ、春奈さんとの話を終えた。

## Ⅱ. 「支援者の心の奥に隠された自信のなさと不安」に着目したグループ場面の再構成

### 1. グループ場面の再構成の目的

このグループの場面記述の目的はグループワーク実践を行っているワーカーである私とメンバーである春奈さんとの関係性及びメンバーや他のワーカーとの関係性、あるいは私が示した態度について注目して振り返り、そのなかに隠されている課題や問題点について明らかにすることである。

### 2. 場面の再構成のなかで自信のなさや不安がグループに与える影響に関する気づき

私がこの場面においてワーカーとして気づくべきであったことや、メンバーに対する支援者としてとるべき態度についてある種の「ゆらぎ」を感じている。その「ゆらぎ」のものは「ワーカーとしてはこうあるべきだった」と他の人たちから思われたいという自信のなさや不安から来ている。本稿では何気なく私が感じている自信のなさや不安、ゆらぎなどに注目し、事例を通してその背景にあるものを浮き彫りにすることを試みる。

#### 1) 多様な価値観を持つ必要性

エピソードを読み直し、振り返るなかで自覚できたことは多い。そのなかで一番最初に気が付いたのはワーカーとして支援する際に自分の価値をどこにしているかということであった。このエピソードの場面で、私が優先していたのはグループ形成の安定した運営である。ありていに言えば、グループワークをそつなく運営し、メンバー同士が和気あいあいと過ごすことができる場所に一番の価値観をおいていた。

たとえば、グループワークに遅れてきた春奈さんが、初めてグループワークに参加した菊池さんに興味を持ったとき、私は春奈さんのこれまでの行動から推察して、春奈さんが菊池さんの気持ちを逆なでしたり、傷つけたりするのではないかと心配で仕方がなかった。また、春奈さんの誹謗中傷する言葉に私の心が傷つけられたとき、他のメンバーへの影響を考えて、ストレートに自分の怒りの感情を表にするのをためらった。ここではグループの各メンバーに不愉快な思いをさせないように配慮している。つまり、グループの運営に波風を立たせないところに力点をおいており、グループワークの運営をその価値観に基づいて力を発揮しようと努めていた。

しかも、グループの安定した運営を行うことが自分の役割だと考えており、グループのメンバーをほどよくまとめ、楽しくグループワークを行うことがワーカーの大切な役割だと思い込んでいた。加えて、自分が支援しているグループをうまく運営している支援者が高い評価を受けると思っていた。それと同時に、「グループの運営が、もしかするとうまくいかないかもしれない」という自信のなさや不安も心の片隅に隠し持っていた。

ある意味で、グループの円滑な運営に力を注ぎ、支援者が役割意識をもってグループのメンバーの支援をすることは重要なことである。その目的を持ち、達成することによってワーカーとしての潜



在能力を育てる可能性を高めることができる。しかし、その一方で、グループの安定した運営という偏った価値観に力点を置くとグループの支援を行っていた私は、それと同時に、「グループの支援に破綻が生じたらどうしよう」という自信のなさや不安を隠し持っていたことに気が付いた。

## 2) 自責の念と自己防衛

体育館に論<sup>さとし</sup>さんが残り、春奈さんと私が会議室で話し合いをすることになったとき、論さんをはじめとするグループ『さくら』のワーカーやメンバーに申し訳ないという気持ちが一層強くなった。「自分がうまく春奈さんに関われないということから生じたトラブルでグループ『さくら』のみんなに迷惑をかけてしまった。悪いのは自分だ」という自責の念にかられた。その自責の念が私に重くのしかかり、心も身体も硬直し、無言のなかで誰かに助けを求めている。そして、自責の念から逃げ惑いながら、結局は自分の心の内にひきこもり自己防衛を図ろうとしていた。

グループの運営に対して「うまくできないのではないか」という漠然とした自信のなさや不安を抱えていれば、グループ内で生じた争いをトラブルとしか捉えることしかできない。トラブルに対して自責の念を抱くことになれば、その時その場の状況を適切な形で受け止めることができない。今ここで起きている問題に対しては働きかけていることもできない。私は混乱とした頭のなかで自問自答した。

私は自信のなさや不安の渦のなかで溺れそうになりながら、グループワークのメンバーとの関わりを続けていたことに気が付いた。そして、春奈さんとのトラブルが生じたときには自信のなさや不安から逃避するために自責の念の渦のなかに逃げ込んでいた。しかし自責の念にとらわれて今こ

こで展開している出来事にとらわれていた私は、さらにうまくできないという自信のなさや不安を募らせていた。私のなかにある自信のなさや不安と向き合わないままに、グループワークのワーカーを行っていた私の問題がここにはある。

## 3. 自信のなさや不安と向き合わないことから生じる「抱え関係」

私は福祉型障害者（入所）施設で24年間勤務した経験がある。この経験のなかで春奈さんと関わる際に感じている自信のなさや不安を感じながら支援した人は数多くいる。また、春奈さんと類似した中傷や批判をする人に出会ったことも少なくない。しかし、たまたま私が彼らの標的にはなかったことがない理由から、その経験が活かされていないのかもしれない。春奈さんが初めて私の感情や言動に絡みついてきたときは非常勤のワーカーなので、物珍しくて「試し行動でもしているのかな」と気にしないようにしていた。あるいはもしかすると、誰かと重ね合わせて「転移」を起こしているのかな等と考え、あるいは、「彼女の誹謗中傷する行動は過去の経験のなかで学習したことであるに違いない」と考え、うまく距離をおいて私のほうが逆転移を起こさないようにやり過ごしていた。また、春奈さんとかかわるのは週に1度、2時間程度なので、彼女の言動を柔らかく受け留めたり、うまく避けたりしてやり過ごそうと思っていた。

しかし、春奈さんと初めて、グループ「さくら」で挨拶を交わして以来、彼女の不健康な言動に敏感になり、不必要な見守りをしたり神経を注いできたりしてきたことは間違いない。なぜそうなったのかは明確な理由はないが、初めから、派手目の彼女の言動が気になっていたのは確かである。なぜか春奈さんは、他のメンバーとは異なり、私を見る目が心なしか鋭かった。最初は、春奈さん

の言動の良し悪しに関係なく、「私の何が気になるのかな」と思ってみたり、「非常勤のワーカーである私にかまってもらいたいのかな」と考えてみたりした。しかし、すぐに答えが出ることもないので、グループワークの支援を学ばなくてはいけないという思いを優先させ、目の前の役割を丁寧に行うことに気持ちと時間を割いてきた。

ところが1年弱に渡ってグループワークのワーカーとしての力をつけるために通い続けてきても、浮き沈みのある春奈さんの私への言動や関わりは思ったように変化していかなかった。正直言って、彼女に対する神経の使い方はグループの和に価値観をおく私にとっては重石になっていた。彼女の気持ちが「浮き浮き」しているときは何とかなるが、「沈んでいる」、あるいは「攻撃的な」ときはグループワークのメンバーに強い影響を与えることが多い理由から、ハラハラしながら見守っていた。

春奈さんとグループワークのワーカーである私の関係は、暴れん坊の息子を持つ母親と息子の関係に似ていた。母親が近所の公園で遊んでいるやんちゃな息子の様子を見まもっているときに、我が子が年齢等に関係なく身勝手な自己主張をし、喧嘩やトラブルを起こし始めそうになると、大きな問題にならないようにその場から我が子を引き離し、遊ぶ場所や遊び相手を変えようとする母親の行動に類似している。つまり、春奈さんと私の関係はやんちゃな子どもを持つ母親と子どもの関係、いわゆる「抱え関係」へと陥っていたのである。

私は春奈さんが誰彼関係なく、攻撃的な態度を採ったり、いちゃもんをつけたりしないように、彼女の感情に気配りしたり、言動を見守ったりしていた。加えて、意識して周囲の状況を変えたり、春奈さんの言動を鎮めたりしながら、彼女が「浮き浮きした気分」に切り替えることができるように努めてきた。

また、春奈さんがグループに負の影響をもたらしかねない言動や態度を変えようとしていることがわかると、すぐに先回りをして彼女の動きを抑える方法を考えた。

つまり、私は春奈さんに対して「グループを乱すメンバー」であるというラベリングをしてグループの安定した活動や運営を行おうという、保護的な、片寄った態度に終始していたことになる。ちなみに、臨床家の「抱え関係」については、Winnicott は Holding という概念で捉えている<sup>1</sup>。

#### 4. 私の自信のなさや不安のつくり出す問題

私は支援者として表向きはワーカーとしての役割意識とグループワークに参加しているメンバーの個々の抱えるテーマの解決・緩和の実現を目指してワーカーを務めてきた。

しかし、自分と向き合うなかで、実際にグループワークを行う際には、その表向きのテーマやメンバーの目標に到達することよりも、グループ自体の安定や活動をうまく進めることを優先したグループワークに力を注いでいたことに気が付いた。そのために、グループワーク活動が本来の活動とはならず、グループ・ダイナミクス効果を活かせない、うわべだけのグループワークになっていたきらいがある。

グループワーク実践がそのような事態に陥っていた背景にはグループの和や活動の安定に片寄った価値観をおいていたことがあげられる。また、ワーカーとして支援するなかでグループの運営を安定した形で行えなくなるのではないかという自信のなさや不安を持っていたことが要因として考えられる。

その自信のなさや不安を解消するために、またグループワークの場面を円滑に進める意図から、ワーカーとして自信のない、不安を持つ私はグループワークを円滑に進めるうえで不安要因であ

る春奈さんについて不健康な見守りを行い、彼女が乱れた感情を露わにする事態を回避することに力を注いでいた。しかし、毎回、春奈さんの激しい感情を抑えることができる訳がないという気持ちが残し、自責の念を持つという自己防衛を行っていた。そういう形式のなかで私が持つ自信のなさや不安に向き合うことを避けてきた。また、グループ内でトラブルが起きると、構造的な問題として捉えることをしないで、その人の問題であると決めつけるようとしていた。それは私が自分に生じた課題や問題を自分の力で解決・緩和することができない未熟さから安易に選んだ解決手法であった。春奈さんと私の体育館で生じたトラブルはその典型的な事例である。私は単にグループワークを円滑に進め、スムーズに終わりたいと思い、自分がワーカーとして低い評価を得ることを避けたい一心で春奈さんの激しい感情を押さえつけたりかわしたりしながら、かえって春奈さんとの関係を悪くしてきた。そして、とうとう春奈さんのうっぶんが爆発して今回のトラブルにつながってしまったのである。

## 5. 抱え関係がグループワーク実践に及ぼした影響

Konopka は、グループワークについて「グループワークを行うなかで、意図的なグループワーク経験を通じて、個人の社会的に機能する力を高め、また個人、集団、地域社会の諸問題により効果的に対処し得るよう、人々を援助するものである」と述べ、「集団における個別化の技術」であることを強調している<sup>2</sup>。

私はグループワーク活動を行うなかでの価値観はグループの和や安定した運営においていた。具体的には、メンバーの相互関係やワーカーとの関係を円滑に行うことに価値観をおいていた。そのグループワークの価値観を壊されかねない春奈さ

んの不適切な行動や他のメンバーとの感情のぶつかり合いが始まるのを恐れていた。そして、グループの和や安定した運営を保てない自信のなさや不安があった。これらの理由から、グループ内での春奈さんの周囲を巻き込む軽率な行動を抑え込んだり、彼女の感情に配慮したりするなかで、春奈さんと私の間に「抱え関係」が形成された。

この「抱え関係」は春奈さんがグループ内で和を乱す度に少しずつ形成されてきたものである。そのために、グループ「さくら」で私が実践してきたグループワークはメンバー個々の参加目的や活動の意義を見失い、グループ活動が平穩・無事に終われば「うまくいった」と評価してしまう、本来のグループワーク実践の目的や意図と乖離した活動へと陥ってしまった。したがって、春奈さん以外のメンバーは、春奈さんと私の不健康な抱え関係が形成されたことにより、グループワークを実践する際に必要とされる「抱え関係」を拡充し、二者以上のグループ関係へと視点を移行していきながら次第に他のメンバーを含めた「抱え環境」へと拡大促進していくという機能が不全に陥ってしまっていた。

これらの理由から、春奈さんは、ある意味で、言動を抑制されたり、感情に配慮したりする対象となり、個々のメンバーがグループワークへ参加している目的の達成が二の次におかれてしまっていた。この状況は程度の差はあるものの、他のメンバーも同じ状況におかれている。つまり、私は表面的にうまく行っているグループの和や安定した運営を行うことに力を注いでおり、グループ・ダイナミクスを活用して、それぞれのメンバーの参加目的を満足させるような取り組みに重きをおいて来なかった。つまり、表面上の「和」や安定した運営を大切にし、本来のグループワークの活動に力点をおいてこなかったのである。

グループ「さくら」で私が学びたかったのは、

グループダイナミクスを活用し、個々の参加メンバーが求めているものを実現する、グループワークを通じて個別支援を行う手法であった。しかし、現実的には、グループワーク実践を進めるなかで、私は「グループの和や穏やかな運営」に支援の価値をおき、その目的のために、メンバーに対して「不健康な見守りに重きをおく」姿勢を保ち、春奈さんとの間に「抱え関係」を形成してしまっている。

結果として、私の示すその態度はグループのメンバーに誤ったグループワークの実践を強いてしまい、活動の方向性をあいまいなものにしてしまっている。

つまり春奈さんと私が形成していた「抱え関係」は春奈さんのグループワークへ参加する意義も失わせたが、他のメンバーの抱える葛藤の表出をワーカーが受け止め、問題の緩和・解決に向かう機会さえも和を尊び安定した運営に主な目的をおくなかで奪ってしまっていたのである。

## 6. 春奈さんが教えてくれた私のワーカーとしての課題

本稿では私が気になった場面を記述することによって自分が常に隠し持っている自信のなさや不安を表に出し、それらの感情が私のグループワークを実践するうえで支障となっていることを自己覚知し、うまく整理することができた。また、自信のなさや不安を整理することで、(春奈さんと私が抱え関係を形成することで)私のグループに所属するメンバーとの関係全体に対して、自分の偏った価値観から、保護的な関わり方を行っていることが明らかとなった。

しかし、本稿の仕上がり完璧であるという訳ではない。当然、多くの課題が残っている。たとえば、春奈さんと私のお互いの感情のぶつかり合いのなかで感じた怒りの感情に対して適切に対処

できずに不安を持ってしまったという事態があり、なぜそうなったのかなという吟味が行われていない。

春奈さんが「まったくあいつは専任のスタッフでもないのに口うるさいよね。自分を何様だと思っているのだ。ねーみんな」と言いながら、他のメンバーの同意を得ようとしたことによってグループ活動の展開が急に負の方向へ転換している。この時私は強い怒りの感情を抱いた。しかし、その場では周囲の状況や他のメンバーなどの感情を考慮して、怒りで高揚した感情を自ら抑え込んでいる。ところが、その乱れた感情を抑えきれずに時間や場面をずらして、さらに高まった感情を整えることもしないで、春奈さんに対して、「私は心の底から怒っている。あなたを許せない」と彼女に怒りの感情を投げつけている。

この怒りの感情は春奈さんが私に対する感情を言葉にして投げつけたことによって私の心のなかに引き起こされた彼女に反発する私の感情である。春奈さんはこれまでどのような私の言動に刺激をうけ、その感情を私にぶつけてきたのであろうか。

春奈さんの「まったくあいつは専任のスタッフでもないのに口うるさいよね。自分を何様だと思っているのだ。ねーみんな」という、この私のワーカーとしてのプライドや人格を粉々にしてしまいそうな、この言葉は単に私を叩き潰そうという狙いをもって発したのではないような気がした。あらためて考えてみると、あの言葉には皮肉も混じっている気がする。加えて、これまでの二人の間にくすぶっていた、思い通りにならない交錯した感情が見てとれる。

春奈さんと出会って、ある程度時間が経っているので、この場面では春奈さんは「試し行動」を行ってはいないことは明らかである。1年弱の私と春奈さんとの関わりをのなかで、「好意的」な関



わりや「攻撃的」な関わりの双方を経験するなかで、私は一貫して春奈さんとの間にほどよい距離を常におくように配慮してきた。そのような私の態度に春奈さんが苛立ちを感じていることも時折感じていた。そのような視点から考えると、春奈さんの心の内には、私との関係を深めたいという気持ちがあったのではないかと推察できる。これまでの春奈さんの言動を見てみると、それは私の気分を害してでも良いから甘えたい、私との時間を共有したいという意思が彼女の心のなかで働いているのではないかと思える節がある。

春奈さんが「あの職員は1年もこの活動に参加しているのに、仲間をまとめられない職員なんですよ。役に立たないから期待しないほうが良いですよ」と大きな声で誹謗中傷を口にしたときに、私は春奈さんが見て取れる形で自信のなさや不安を背景とした「心配そうな表情」を見せたのかもしれない。その時に春奈さんは私の自信のなさや不安を感じ取り、その負の要因の一つが春奈さんの存在であることに気が付き、なかなか埋めることができない春奈さんと私の関係に怒りを感じてしまった可能性がある。また、私も自分を見失い、春奈さんに対して「グループの和を乱すメンバー」という意識で彼女に「問題を起こすメンバー」とあるという烙印を押したり、「メンバーとして認めたくない人」と思っていたりしている私の怒りを込めた感情が春奈さんにストレートに伝わっている可能性がある。それを春奈さんが感じ取り、それに反発した彼女の怒りが矛先を私に向けさせ、再度、彼女から反発を向けられた私は、一層強い怒りの感情を表出させられることになってしまった。ここでは春奈さんと私の怒りを介した敵対関係の悪循環が繰り返されている。どう考えてみても春奈さんと私の激しく感情がぶつかり合ってきたプロセスはワーカーとメンバーが健全な支援関係のなかで生じた場面であるとは言い難い状

況が繰り返されている。

この事例で示された春奈さんの持つ不安や怒りの表出は支援者の感情を激しくゆさぶる過程を辿っている。しかし、支援者に生じた感情はメンバーの持つ怒りや不安が作用したものである。問題を解決するためにできる重要なことは、支援者がメンバーの行った感情表出を受け止めようとするときには、メンバーが表出した感情をそのまま受け止めようとする態度を示すことである。そして、メンバーの表現した感情をそれによって受け止めようとするときには、メンバーが表出した感情と、それによってゆさぶられた自己の感情を的確に認識することが大切である。

本稿で取り上げた場面での私は、春奈さんの示した怒りの感情に刺激され、そして彼女の感情に私が押しつぶされ、自分の感情を整理することができないなかで、春奈さんの怒りの感情に対して真面に反応している。また、自分に生じた感情に対し耐える力がないことから、自分の欲求に任せて春奈さんを操作しようとしている。そのために、春奈さんの怒りの行き場がなくなって、彼女自身がその感情を抱えたままになっている。つまり、春奈さんはグループに適応することを要求され、怒りを押さえ、我慢することを強いられている状況にあったことになる。私は自分が支援者として耐えることなく、メンバーに耐えることを求めている。

## おわりに

グループワークにおけるグループはある一定の目的に向けて意図的に形成するものである。グループを支援するための媒体として利用するならば Winnicott の Holding 概念を用いた「抱え関係」や「抱え環境」として準備することが必要だと思われる。また、支援者に生じた感情をグループ場面以外で表出し整理することができる人間関係を

つくっておくことも重要になってくる。

私は自分のグループワーク実践を振り返る作業を通して、グループワークには、特定のメンバーとワーカーという二者関係から二者以上のグループ関係へと関係の視点を移行し、「抱え環境」へ拡大促進していくことが大切な活動であることを学んだ。また、その前提として支援者自身のグループに対する感情や認識を整理し、自覚する作業が求められることを自覚した。

神科看護』, 千葉県立衛生短期大学 (成人看護学), 精神看護出版, , 2013, 40(4), 60 ～ 67 頁

## 引用文献

- 1 Wnnicott, D.W. (1972) Holding And Interpretation:Fragmento of an analysis.  
(北山修監訳『抱えることと解釈』, 岩崎学術出版社, 1989)
- 2 Konopka, G, (1963)Social Group Work:A helping process.(前田ケイ「ソーシャル・グループワーク」全国社会福祉協議会, 1963)

## 参考文献

- 1 川田誉音『グループワーク』, 海声社, 1990
- 2 一村小百合「グループ活動とグループワークの役割について」, 関西福祉科学大学紀要 11 号
- 3 石川みち子「あるグループワークの試み：看護場面の再構成を用いて (人間科学編)」, 千葉県立衛生短期大学紀要, 1984, 65 ～ 71 頁
- 4 宮本真巳『感性を磨く技法 1 看護場面の再構成』, 日本看護協会, 1995
- 5 宮本真巳『感性を磨く技法 2 「異和感」と援助者のアイデンティティ』, 1995
- 6 氏原 寛・成田 善弘『転移・逆転移—臨床の現場から』, 人文書院, 1997
- 7 北山 修『錯覚と脱錯覚』, 岩崎学術出版社, 1985
- 8 尾崎 新『臨床・精神科デイケアの「ほどよさ」と「大きなお世話」』, 岩崎学術出版社, 1992
- 9 尾崎 新『対人援助の技法』, 誠信書房, 1997
- 10 外口玉子『方法としての事例検討』, 日本看護協会, 1981
- 11 正村帆南他「看護場面の再構成による臨床指導 (2) 学生が精神看護学実習に求める教育方法の検討：学生グループによる意見交換を通して」『精

## The Study of influence of Social Group work practice to the social worker and the group work member relationship

Toshinori TANAKA

### **【abstract】**

The purpose of social group work practice is to help develop the group dynamics that promote the satisfaction of member's socioemotional needs while facilitating the accomplishment of group tasks..This research seeks to help restructure the fundamental model of social group practice dimensions. By using the sample story, author made it possible to express the worker's anxiety and discouragement in reality. Author is applying this method with realistic story to appoint the negative impact of social group work practice such as the issues of having unbalanced interaction and the member's negative perceptions. In this research, author has selected "Sakura Social Service Agency" as a sample group to observe, assess, and understand influence of group dynamics to the behavior of both individual group members and the group as a whole in a situation taken by true sample story.

### **【key words】**

group work, scene reconstitution, holding, fluctuation, group work not established